

アーネスト・サトウ『会話篇』における 言いさし表現について

愈 三 善

1. はじめに

サトウの『会話篇』（1867～8年に編纂、1873年に出版）（注1）は興味深いテキストである。EXERCISE を読み進むにつれ、まるで、日本事情のテキストを読んでいるかのような錯覚に陥る。語学のテキストなのに当時の人々の生活臭が漂っている。その上、EXERCISE の会話は実用的で、自然で、且つ臨場感に溢れる。会話が醸し出す生き生きとした雰囲気も魅力的である。会話には、かつて稿者が学んだ日本語のテキストでは感じられなかったテンポのよさもある。一体、このテキストはどうなっているのか、と気になっていたところに、目に留まったものが、引用文（注2）の下線部の言いさし表現である。

- (1) ご ていねい に ありがとう ございます. さあ まず, まず, こちらへ どうか. ____ . わざと とそ を しとつ. ____ . (EX 15-4)

I thank you very much for your kindness. Pray sit down here, and permit me to offer you a cup of toso.

この例文にみえる「どうか」「しとつ」といった言いさし表現も、稿者が以前学んでいた日本語のテキストには見られなかったものである。稿者は『会話篇』にみえる言いさし表現がはじめて日本語の教材に掲載された言いさし表現である可能性を考えているが、この点については機会を改めて論じたい。本稿の目的は、『会話篇』にみられる言いさし表現について調査し、様々な観点から検討することにある。

ここでいう言いさし表現とは、上記の例文の下線部の「どうか」「しとつ」といったような、文末まで言わないで「言いさす」形をしているものである。この言わない（省略された）ところに話し手の何らかの意図が含まれており、

(2)

聞き手はその話し手の意図を察し、話し手の言わんとするところを理解するのである。サトウの英語訳から (1) の言いさしの後を復元すると、「どうか」の後には「おすわりください (pray sit down)」が続くことになる。また、「しとつ」の後には「おめしあがりください (permit me to offer you ~)」が省略されていることになる。即ち、「どうか」は「おすわりください」の意味を、「しとつ」は「おめしあがりください」の意味を含意しているのである。このような省略、特に文末を省略する表現を、言いさし表現と呼ぶことにする。

なお、言いさし表現の後に、省略されていると思われるところを紹介する際に、『会話篇』中の英語訳を括弧の中に入れて示すが、当然ながら必ずしも問題としている日本語の意味するところと完全一致しないことがあることに注意されたい。

2. 言いさし表現についての先行研究

管見の限りでは、サトウの「言いさし表現」を扱った先行研究は確認されなかった。さらに、江戸後期・明治初期の言いさし表現に着目した研究も見当たらなかった(注3)。一方、現代語の言いさし表現を扱う先行研究は多くある。ここでは、現代語の言いさし表現についての研究の中から、サトウの言いさし表現の特徴をみる上で必要と判断されるものを中心に、先行研究の概観をしたい。

例えば藤原(1991)は、日本語の話し言葉の中で「中途終了文」を含む省略という現象が多用されていると指摘する。この省略という現象が多用される背景について、牧野(1996)は、日本のように、言語によるコミュニケーションへの依存度が相対的に低く、その分、非言語への依存度が高い、いわゆる「察しの文化」では、さまざまな言語的省略が起りやすいと述べている。高橋(1993)は、話し言葉の中での文末の省略について、「接続助辞で終わっている文」「条件形で終わる文」「第二中止形で終わる文(「～して」のかたち)」「引用助辞で終わる文」に分類し、この四つの形式を合わせると、九割ぐらいになるという。特に「接続助辞で終わっている文」が一番多く、全体の半分近くを占めるとする。その他のまとまったものとしては、疑問詞または陳述副詞で終わる文、「～ように」で終わる文があるという。高橋のほかに、言いさし表現をまとまった形で扱ったものとしては岡田(1991)がある。

言いさし表現について部分的に扱ったものとしては、「接続助辞で終わる文」についての研究が多い。白川(1990)は、言いさし表現に用いられている「て」

には、事情の説明、感嘆、陳述、感謝、非難の五つの意味が認められるという。金城（2001）は、文末表現としての「けれども／が」に注目し、この「けれども／が」は「相手に対して情報提供が十分ではなく、そのために相手に迷惑をかけるおそれがあるかもしれない、相手の質問の動機を満足させるものではないかもしれない」という話し手の意識を表すものであるという仮説を立てている。「接続助辞で終わる文」についての研究には、三原（1995）や佐藤（1994）などもあり、とりわけ「けど」について分析した報告が目立つ。

言いさし表現は、依頼、願望や断りなどの特定の言語行為と結びつき、聞き手に何らかの負担をかける場合に使われると三原（1995）はいう。これは、話者が全部言葉で言わなくても、聞き手がこちらの意図を察することができるのと話者が認めて、聞き手に負担をかけるようなことはなるべく言葉にせず、こちらの窮状を表す事実のみを示して、相手の反応を待つという「共話的」な会話の姿勢が、相手を尊敬すべき一人前の大人として待遇することにつながると岡田（1991）は説明している。水谷（1989）も文末省略、即ち、言いさし表現を待遇表現の一つとしており、また諸先行研究においても最後まで言わないことが丁寧であり、相手への配慮であり、遠慮深く謙虚と感ずるとしている。熊谷（1997）は、文末の省略によって、きびきびした口調・テンポの良さ・砕けた雰囲気・丁寧さや改まり・物腰の柔らかな慎みある態度などが現われると述べている。

さて、日本語のネイティブ・スピーカーなら、その使用の効果を意識することなく、だれでも状況に応じて言いさし表現を使うことができるが、日本語学習者は、状況に応じて的確に使うことや、言いさし表現に込められた相手の意図を理解することに困難を覚えることがある。稿者自身も、つい最後まで言いつくして、きつい印象を与えてしまう場合がしばしばある。

こうした日本語学習者の悩みを受けてか、日本語教育の現場あるいは日本語教育法の研究の場において、言いさし表現の導入と指導法を研究する必要性があることが指摘されている。例えば従来の日本語教育における言いさし表現の扱いについて、堀口（1985）は、文型中心の教科書にはほとんど出てこず、会話中心の教科書においても言いさし表現の出現回数や種類は少ないと報告している。同様に佐藤（1994）も、従来日本語初級教科書においては、言いさし表現がまとまった形で正面からとりあげられたことは殆どなかったと述べている。このような日本語教育の現場における言いさし表現の扱い方に対する指摘からすると、言いさし表現が頻繁に現れるサトウの『会話篇』は、現代の日本語教科書からすれば極めて特異であると言える。つまり、サトウの

(4)

著した『会話篇』は日本語教育史・教材史研究に研究において見逃すことが出来ない存在なのである。

3. 本研究の目的と意義

前節において現代語の言いさし表現の分析を行ったものを中心にして先行研究について整理した。既に述べたように、現代語の言いさし表現に関する先行研究は多くあるものの、近代語を含めた過去の文献資料にみえる言いさし表現について扱った研究は殆どない。本稿で対象とする『会話篇』にみえる「言いさし表現」について言えば、おそらくそれは日本語教科書に掲載された初めての「言いさし表現」であると考えられ、日本語教育史および教材史上極めて重要な位置付けにあると言っていいだろう。しかし、従来『会話篇』における言いさし表現について詳細に検討した研究は全くない。

本稿の目的は、今日まで全く注目されずにいたサトウの『会話篇』にみえる言いさし表現を取り上げ、それについて種々の観点から検討することを通して、江戸後期・明治初期の言いさし表現の一端を明らかにすることにある。そうした意味で、本稿は『会話篇』を日本語教科書および口語資料として扱う初めての研究であり、また、江戸後期・明治初期の言いさし表現に関する研究としても初めての研究となる。ただし、本稿における考察は今後の研究のための予備的な考察にとどまっている。なお詳細な考察に関しては、稿を改めたい。

4. 言いさし表現の認定について

管見の限りでは、何を言いさし表現として認定すべきかという基準を明示した先行研究は見当たらなかった。本稿では、ひとまず稿者の現代日本語に関する知識を援用し、稿者自身の判断で言いさし表現か否かを判断した。ただし、倒置法とも、言いさし表現とも解釈できるものは、今回扱う言いさし表現からは外す。『会話篇』の例文には倒置法が多く用いられており、以下の(2)やEX15の5番のような言いさし表現の認定において注意が必要なものがある。

(2) いえ、もう、お か ま い なく、 た び た び でます の に。
(EX 23-43)

Pray don't give yourself so much trouble on my account. You know how frequent a visitor I am.

この例文にみえる「のに」は、倒置法とも、言いさし表現とも解釈できる。言いさし表現だとすると、「これでは、とんだご迷惑をおかけします」などが続くと考えられる。このようなどちらとも取れるものは、言いさし表現の認定から外すことにした。

さて、問題はその言いさし表現が意味するところがどのようなものであるか、であるが、本稿では言いさし表現が意味するところを推察するにあたって、以下のような手順を踏む（注4）。

そもそも、今回資料として用いた『会話篇』は、左のページに会話文が掲載され、右のページに英語訳（注5）が付されている。即ち、日本語の会話文上にある言いさし表現に対応する英文を用いて、言いさし表現の意味するところを「補う」という方法が考えられる。例えば次の例文（3）においては、下線部の英語訳に見られるように、日本語で省略されている成分（部分）を英語訳で補っている。本稿で扱う言いさし表現の典型的なものである。

(3) おそれいりまして ございます。 へい！ ただいま も きう に
さいそく いたし に やりました が、 どうも はや じつ
に. _____. (EX 17-40)

(O.) I humbly beg pardon, sir. I've just sent to hurry them up at once; but really I am very sorry.

「どうもはやじつ に」のところが言いさしの箇所である。この箇所を、英文では「I am very sorry」を入れて、省略された部分を補っている。ただし、サトウは日本語の言いさし表現全てに対し、省略された部分を補った英文を添えているわけではない。それは、おそらくサトウの英語訳があくまでも日本文を理解するための補助的なものであることと関係しているのだろう。とにかく、本稿では英語訳に直接の表現がなくても言いさし表現として認め、考察の対象とする。

その場合、やはり問題となるのが日本語の省略された部分の意味をどのように推測するかであるが、基本的には文脈等から判断するしかない。ただし、いくつかが手がかりとすべきことはある。例えば（4）を見てみよう。

(4) いえ、いろいろ ご ちそう に あずかりまして わたくし こ
そ かえて. _____. こんにちは よう お はやく おでかけ
なさいました. (EX 16-7)

(6)

H. No; really you gave me a great feast. It is very good of you to come so early to-day.

下線部の「かえって」は明らかに言いさし表現であり、「ありがとうございました」などが省略されていると看做されるが、英文には「ありがとう」という直接の表現はない。ただし、英文「No; really you gave me a great feast」の中には、感謝の意が含まれていると考えられ、そこから「かえって」の意味するところを「補う」ことができる。

次の(5)の場合は、同一の EXERCISE 中のそれよりも前に酷似した構造をしている(6)があり、それをもとにして省略された部分を補うことが可能である。

(5) まこと に かわりやすい てんき で はや. _____. (EX 23-13)
The weather is really very changeable.

(6) とかく かわりやすい てんきで どうも. _____. (EX 23-3)
What a nuisance this changeable weather is.

同一会話中にある(6)において既に英語訳で言いさし表現「どうも」が意味するところを補っている故、それよりも後に出現する類似した表現の(5)で再び英語訳「is a nuisance / What a nuisance」を付けることを避けたのだとも考えられる。

また(7)のように英語訳に省略の記号が付いているものもある。

(7) なるたけ お き に さわらぬ よう に いいます が. _____.
(EX 7-17)

I try not to speak in a way that might offend you, but —

この例文にみえる日本語側の「いいますが」は明らかに言いさし表現であり、「うまくいきますかわかりません」などが省略されていると看做される。しかし、英文には「but-」と表記されているだけである。一方、同じ「が」で終わっている言いさし表現でも(8)のように英語訳を付けている場合もある。

(8) これ は あまり そまつ な しな で ございます が. _____.
(EX 25-23)

This is very shabby article, but I beg leave to present it to you.

この例文には「一が」の後に省略されていると考えられる「どうか、お受け取りください」に当たる英文「I beg leave to present it to you」が添えられている。つまり、同じ接続助詞「が」で終わる言いさし表現に対しての訳の在り方が(7)と(8)では異なるのである。

なお、上で見た(4)(5)(7)のような英文側に日本語会話中で省略されていると考えられる部分を明示的に表現していない例は10例あった。

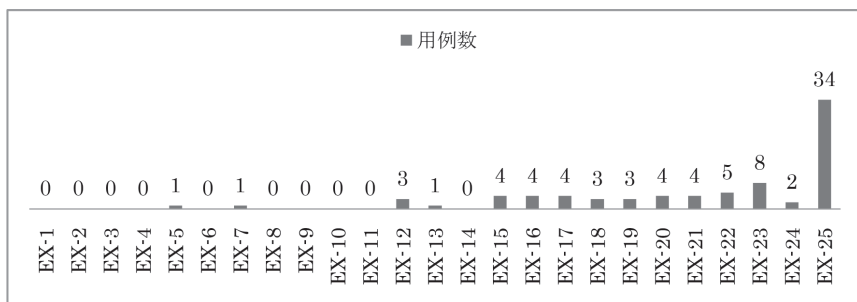
以上のような基準によってサトウの『会話篇』から言いさし表現を抽出した結果、36種類、延べ81回の言いさし表現を得ることができた。先述した日本語教育における言いさし表現の扱いの在り方から考えると、今から140年ほど前に編纂された、たった一冊のテキストに、81回もの言いさし表現が出現しているということは驚きである。

以下、『会話篇』にみえる言いさし表現の「EXERCISE 別の出現状況」、形式、機能、言いさす場面について検討する。

5. EXERCISE 別の言いさし表現の出現状況

まず、全体的に見ると、グラフに示したように、EX 5から言いさし表現が使用されている。EX 1・2・3・4・6・8・9・10・11・14の10編には言いさし表現が確認できなかった。つまり、前半部では言いさし表現がさほど使用されていないのである。それに対して、後半部のEX12とEX15～EX25までの間には言いさし表現が多く使われている。言いさし表現の用例合計81例のうち、79例までが『会話篇』の後半部に配置されている。

表1 EX 別の言いさし表現の出現状況



特に、最後のEX25には34例も言いさし表現がみられ、突出している。その次はEX23で8回ある。3番目はEX22で5回ある。4番目はEX15・16・17・20・21で4回ずつある。続いて、EX12・18・19に3回ずつあり、EX24にも2回ある。言いさし表現のほとんどは後半部に集中している。

総じて『会話篇』では、その前半部に言いさし表現をあまり導入されておらず、後半部に多く導入されている。この前半部と後半部の出現回数の違いは、一見すると単純な理由からとも考えられる。堀口(1985)、佐藤(1994)によると、初級レベルでは言いさしは使いこなせない。別の言い方をすれば、初級のテキストには言いさし表現は導入しにくいということである。つまり、サトウの『会話篇』の前半部を初級と看做し、後半部を中・上級と看做することができれば、堀口、佐藤両氏の知見にもとづいて、初級レベルに言いさし表現が少なくなっており、レベルがあがる程に言いさし表現が多くなっているということが出来る。そこで、前・後半部を通して、各EXの状況設定等を調べた。調査したのは、以下の三つの点である。

第一、EXの内容が会話形式であるか、否か。言いさし表現は、話し手と聞き手の遣り取りによって生まれるものなので、会話である必要がある。

第二、各EXの内容に、ある程度の難易度差(注6)があるか、否か。既に述べたように、言いさし表現の使用は、日本語の能力に比例すると考えられるためである。テキストのレベルに即していうと、初級よりも中級に、中級よりも上級において言いさし表現の使用例が多くなるはずである。

第三、話し手と聞き手の関係に注目する。先行研究が指摘するところによれば、言いさし表現には、丁寧さ、相手への配慮、遠慮深さ、謙虚といった態度を表す機能があるため、こうした働きが可能となるには、そのような話し手と聞き手の関係を前提とした状況設定が必要であるためである。

以上の点において、『会話篇』全編のEXの内容を検討した結果、出現回数が少なかった前半部と出現回数の多かった後半部には、はっきりとした違いがあった。

まず、前半部の各EXの場合、形式の面では、部分的には会話形式の箇所もあるものの、大部分が「行く/来る」(EX1)、「買う/売る」(EX2)、「聞く/伺う/尋ねる」(EX6)、「言う/話す」(EX7)、「おっしゃる/申す」(EX8)といった状況が設定され、この状況設定において使用される可能性のある短文形式の例文が配置されたものであった。

難易度においては、EX5のような上級者向けの内容もあるが、全体的にみると初級レベルである。

話し手と聞き手の関係としては、主従の関係が大部分である。前半部の従者は食事やお風呂の支度や買い物といった身の回りの世話をする男性使用人で、主人は従者に指示や命令を下し、従者はそれに従うといった関係である。主人の言葉は極めてぞんざいな口調であり、しかも命令形が多い。例えばEX5は男性使用人への罵りから始まる。このような人間関係においては、丁寧さ、相手への配慮、遠慮深さ、謙虚といった態度を表す言いさし表現の効果が発揮できない。従って、前半部はEXの形式、難易度、話し手と聞き手の関係において、言いさし表現の使用に適していない。

一方、言いさし表現が集中する後半部のEXは、上記の三つの条件をクリアするものであった。まず、各EXの形式は会話が殆どであった。会話も「火事」(EX12)や「日本の新年」(EX14)のように、一つの話題で構成されていた。また自分の意見を述べる箇所も多く、一人の発話が長いものも多い。例えばEX21では商人の取引における約定違えの訴訟について、一人の発話が22行にも及ぶ。

難易度においては、後半部の場面設定が商人の取引における約定違えの訴訟や、謁見・日本の新年・季節・気候・訪問といった当時の日本事情を彷彿させるもので、このような話題には慣用表現や社交辞令の言葉、自己紹介、季節・時効の挨拶、安否の挨拶、辞去挨拶なども含まれるため、日本の風土・風習・習慣に精通していないと会話に参加することが困難であると考えられる。実際、言いさし表現の使用数が突出するEX25には、自己紹介・訪問・安否の挨拶・辞去挨拶などの会話が集められている。さらに、後半部には話題の難しさに加え、表われる表現も非常にこなれたものがあり、学習者がこなれた表現を理解したり、同様な表現を駆使したりするには相当の日本語力が必要である。その点で『会話篇』後半部のテキストの難易度は比較的高いといえる。

話し手と聞き手の関係としては、基本的には主従の関係であるが、後半部の主従の関係は前半部のそれとは少し違って、下位の者が上位の者(番頭・家来)に、主人へのご挨拶の取次ぎをお願いしたり、主人に頼み事をしたりする場面や、次の(9)のように、上位の者と下位の者(給仕人=宿役人・人足・かごや・宿引きなど)の間に微小でありながら、力学が働く場面もある。

- (9) もし だんな、 こんにち は じつ に ほね を おりまして
から、 しょう しょう さかて を どうぞ; ____ . まこと に
もうしかねました が. (EX 17-15)

(Bearer) Please, sir, we've worked very hard to-day. I am really afraid to

ask it, but pray give us a small tip.

給仕人は「どうぞ」と言いさし、あからさまに主人にチップを要求するのを避けながら自己主張をする。後半部には、この例文の内容のように相手（聞き手）に負担をかける場面が設定され、話者は恐縮する態度を言いさし表現に込めつつ、こちらの事情を汲み取ってもらうケースがよくある。また、後半部のEXの中には、主人や上位の者も給仕人に頼らざる得ない状況も設定されている。例えばEX17では、主人が給仕人に頼む・依頼する、そして、労うといった状況も含まれており、これらの状況に関する表現も柔らかい。さらに、(10)のように、親密で対等な人間関係も設定されている。

(10) どうも にた よう の おかた だ と おもって. それ ゆえ.
 _____. やれ, やれ, よい ところ で. さて うちたえまして ひ
 さびさ ぎよい えます. いつも ご さかん で. _____. せん
 ねん は いろいろ ご こうおん に あずかりまして. _____.
 (EX 25-13)

I couldn't help thinking I knew your face, and that made me address you.
 Really, this is most fortunate. I am delighted to see you again after so long
 an interval. And as well as ever. In former days I was much indebted to your
 kindness.

この場面は、言いさし表現を用いるべき最たる箇所と考えられる。表現も非常にこなれたもので、一人の発話も長く、会話の内容も岡田（1991）の表現を借りれば、世間話のように、話の内容そのものよりも、話すこと自体に目的がある会話、あるいは人間関係を重視する会話に属するもので、お互いに相手の意図を察しあう共話的姿勢で話がされているところである。事実、この例文には、「それゆえ」「ごさかんで」「あずかりまして」といったような言いさし表現が3か所も入っている。このような後半部のEXの場面設定も、言いさし表現の出現回数が増えている要因になったものと思う。

以上の分析から、『会話篇』の前半部と後半部の言いさし表現の出現回数の違いは、会話の内容の難易度の差に加えて、EXの形式や話し手と聞き手の関係も関わっていたといえる。会話の内容の難易度が出現回数の違いを大きくしたことは、先行研究の知見通りであるが、EXの形式や話し手と聞き手の関係が出現回数の違いを生み出す一因になっていることは『会話篇』の性質の反映

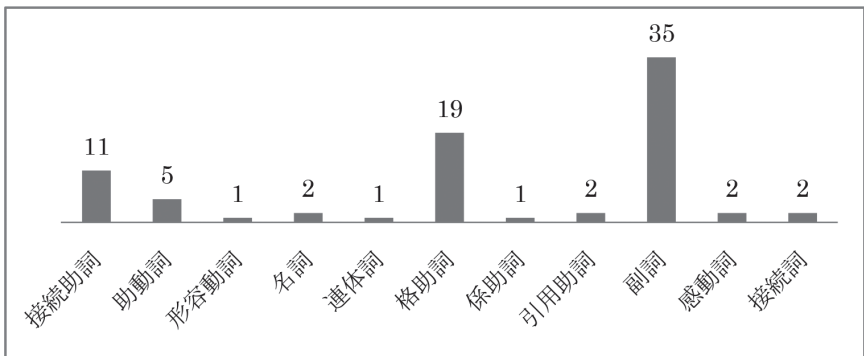
といえよう。

さて、EXERCISE 別の言いさし表現の出現状況を押さえたところで、次節では、言いさし表現の形式面に注目して検討したいと思う。

6. 言いさし表現の諸形式

総使用数 81 回の言いさし表現における末尾の様相を調査した。結果は、以下の表 2 のデータ通りである。品詞の認定は『日本国語辞典』に従った。まず、言いさし表現の形式は、接続助詞、助動詞（一で）、形容動詞（語幹）、名詞、連体詞、格助詞、係助詞、引用助詞、副詞、感動詞、接続詞で終わるものがあった。以上を合わせると、11 種類で、さまざまな言いさし表現が出現していた。

表 2 言いさし表現の諸形式



これらの形式の中で、副詞で終わるものが最高の 35 回を数える。次に、格助詞で終わるものの例が 19 回に及ぶ。3 位は接続助詞で終わるもので、出現回数は 11 回である。4 位は助動詞で終わるもので 5 回あった。名詞・引用助詞・感動詞・接続詞が 2 回ずつ、形容動詞と連体詞と係助詞がそれぞれ 1 回出現していた。

この『会話篇』の出現回数の順位は、先行研究の概観で紹介した高橋（1993）の現代語の言いさし表現の使用状況の報告とかなり異なるものであって、大変興味深い。大きく異なる点は、副詞で終わる言いさし表現と格助詞で終わる言いさし表現の出現回数の多さである。両者は 1 位と 2 位に躍り出ており、二つの出現回数を合わせると、54 回である。これは全体の約 7 割を占める。この副詞と格助詞で終わる言いさし表現は、現代語においては周辺の扱いを受け

るもので、詳しく取り上げた先行研究が見当たらない。

もう一つ目を引くことは、接続助詞で終わるものの出現回数がさほど多くはないことである。何故ならば、高橋（1993）の現代語の形態分析の報告によれば、現代語の場合、この接続助詞で終わるものが一番多く、全体の半分近くを占めるとするからである。

次節では、これらの上位に属する副詞、格助詞、接続助詞で終わる言いさし表現の様相を詳細に検討したい。

6-1. 副詞で終わる言いさし表現の様相

副詞で終わる言いさし表現(注7)の内訳は、表3のとおり、「どうも」「どうか」「はや」「どうぞ」「まことに」「すぐに」「なにぶん」「おおきに」「はなはだ」「じつに」「かならず」「ゆるりと」「いろいろ」「しとつ」「みな」「おそうそう」まで、16種類の副詞が使われている。

表3 副詞の出現状況

どうも	どうか	はや	どうぞ	まことに	すぐに	なにぶん	おおきに
6	5	5	4	2	2	2	1

はなはだ	じつに	かならず	ゆるりと	いろいろ	しとつ	みな	おそうそう
1	1	1	1	1	1	1	1

これらの副詞の中で、「どうも」が6例、「どうか」と「はや」（注8）が5例ずつ、「どうぞ」が4例で、上位に入る。続いて、「まことに」「すぐに」「なにぶん」がそれぞれ2例、「おおきに」「はなはだ」「じつに」「かならず」「ゆるりと」「いろいろ」「しとつ」「みな」「おそうそう」が1例ずつである。以下で、上位にある「どうも」「どうか」「はや」「どうぞ」を中心に、例文を紹介しながらその使用実態を検討する。

まず、「どうも」は言いさしを誘発する典型的な副詞で、次の(11)から(13)までのように、困ったこと、お詫び、お礼などを言う場面に用いられ、申し訳ないという気持ち、恐縮する気持ちを示している。

(11) いや、 つよい かげ で どうも. ____ . (後略) (EX 23-26)

This strong wind is a nuisance. (後略)

(12) せっかく お いで の ところ なん の お あいそう も ご

ございません で、 はなはだ どうも、 ____。 (EX 25-37)

I am really ashamed not to have given you a better welcome, when you have come so far on purpose to see me.

- (13) いや その せつ は いろいろ どうも、 ____。 あんな に おかまい くださっちゃ めった に あがられません。 (後略) (EX 25-49)

Not a bit. I enjoyed myself very much. You entertain me too well; I shan't dare to visit you. (後略)

対応する英語訳から推定すると、(11)の「どうも」は「困ったことです (is a nuisance)」、(12)では「申し訳ございません (I am really ashamed)」、(13)では「有難うございました / お世話になりました (I enjoyed myself very much)」が省略されていると考えられる。この「どうも」の使い方において、目を引くのは(12)の「はなはだどうも」や、(13)の「いろいろどうも」のように、副詞を二つ重ねたり、「どうもはやじつに」(EX 17-40)のように副詞を三つ重ねたりして、連語のように使うケースである。副詞を重ねて使うことによって、話し手の気持ちの度合いの濃さを示しているものと見做される。

次に「どうか」の働きをみる。この副詞は(14)から(16)までのように、もっぱら何かを勧めたり、懇願したりする場面に用いられている。

- (14) ご ていねい に ありがとう ございます。 さあ まず、まず、こちらへ どうか。 ____。 わざと とそ を しとつ。 (EX 15-4)

I thank you very much for your kindness. Pray sit down here, and permit me to offer you a cup of toso.

- (15) どう いう しょちぶりに なさる か、 その ご けつだんの ところをお すみやかに どうか。 ____。 (EX 21-9)

How do you propose to deal with the case? Pray let me know your decision at once.

- (16) (前略) つきまして は るす ちゅう かない ども を なにぶん どうか。 ____。 (EX 25-27)

(前略) I hope you will be kind enough to look after my wife and family now and then while I am away.

ここでも対応する英語訳から省略されている部分を推定してみると、(14)

(14)

では「お座り下さい (Pray sit down)」、(15) では「知らせて下さい (Pray let me know)」、(16) では「よろしく見守ってやって下さい (I hope you will be kind enough to look after)」といった表現がそれぞれ省略されていると考えられる。

続けて、3番目の「はや」の使い方をみってみる。元来、「はや」は感動詞であるが、「会話篇」では強めの副詞としての働きをしている。「はや」は、(17) と (18) のようにお詫びや困ったことを言う場面や、(19) のようにお願いをする場面で用いられ、上記の「どうも」や「どうか」と同じ機能をしている。

(17) へい、ただいま は おおき に、 はや. ____ . かきなおして
まいりました。(EX 19-50)

(L.) I'm sure I apologize, sir. I've brought it back rewritten.

(18) まこと に かわりやすい てんき で はや. ____ . (EX 23-13)
The weather is really very changeable.

(19) そんなら、なんぶん よろしう ばんじ はや. ____ . まず こんにち
は おいとま に いたしましょう。(EX 13-9)

Then, sir, I may safely rely on your kindness. I'll take my leave for to-day.

(17) では「申し訳ございませんでした (I apologize)」が省略されているとみられる。(18) では「ほんとうに/じつに (very)」などの強調表現として機能し、後に「こまったものです (What a nuisance/ is a nuisance)」が続く。ここでの「はや」は、上掲 (11) の「どうも」と同じような内容を表現しているとみられる。(19) では「お願い申し上げます (rely on your kindness)」のような意味が含意されているのだろう。「はや」によって、一段と恐縮している気持ちが感じられ、物腰の柔らかな慎みのある態度がうかがえる。

最後に「どうぞ」は、次の (20) から (22) までの要請・依頼のシーンに出現している。

(20) もし だんな、こんにち は じつ に ほね を おりまして
から、しょうしょう さかて を どうぞ; ____ . (後略) (EX 17-15)

(Bearer) Please, sir, we've worked very hard to-day. I am really afraid to ask it, but pray give us a small tip.

(21) (前略) ご りょしく は ご ほんじん が さしあい にて よ
んどころなく わきほんじん にて ご かんべん を どうぞ. ____

__. (後略) (EX 17-20)

(前略) The chief hotel is occupied, and we are sorry to obliged to ask you to be satisfied with one of the smaller ones. (後略)

(22) そんな こと おっしゃらず と どうぞ. _____. (EX 18-45)

(K.) Don't talk like that; Pray give me a fare.

場面設定にあった表現で表せば、(20) では「(どうか) 頂戴しとうぞんじます (pray give us a small tip)」、(21) では「申し訳ありませんが、お願いいたします (we are sorry to obliged to ask you)」、(22) では「お乗りになって下さいまし (Pray give me a fare)」というような表現が省略されていると考えられる。これらの「どうぞ」が使われている場面は、言いにくい事を相手に伝えるシーンで、「どうぞ」をもってほかに、さりげなく苦情の意味を相手に気付かせている。『会話篇』の「どうぞ」は、意味的に「どうか」に近い働きをしていると言える。

余談だが、(20) と (22) の場面で言いさし表現を用いず、英文「pray give us a small tip」、「Pray give me a fare (提案した料金で乗ってください)」のような言い方をされたとすれば、はたしてこの商談はうまくいったのであろうか。おそらく、稿者の母語 (韓国語) も英語と同様な言い方をしたであろう。日本語の言いさし表現の効果の神髄をみる気がする。

ここまで、副詞で終わる言いさし表現の内訳を見た上で、出現頻度の高い「どうも」「どうか」「はや」「どうぞ」の実例を紹介しながら、その使い方を検討してみた。「どうも」と「はや」は相手の厚意に対するお礼、またはおかまいできなかったことへのお詫びの場面に出現する傾向があり、「どうか」と「どうぞ」は依頼や要求する場面に出現する傾向がある。副詞で終わる言いさし表現からは、お礼やお詫び、依頼や要求をする側の恐縮する気持ちがうかがえ、ゆったりとした大人の会話であるという印象を受ける。

6-2. 格助詞で終わる言いさし表現の様相

この項では、格助詞で終わる言いさし表現の内容を詳しく検討する。調査結果は、表4に示したとおりである。言いさし表現末にみられる助詞としては4種類あり、出現回数は合計19回である。

表4 格助詞の出現状況

を	に	は	へ
7	8	3	1

「を」で終わるものが7回、「に」が8回、「は」が3回、「へ」が1回である。「を」と「に」を合わせると、8割ぐらいである。「を」から例文をもって、使い方を紹介する。

- (23) おい、ねえさん、いい ちゃ を 入れて きて お くれ。
 ついで に かんじょう の かきつけ を. _____. (EX 18-35)
 (S.) I say, waitress, make some good tea, please, and bring the bill at the same time.
- (24) これ、だれ か、お たち に なる よ。お はきもの を。
 _____. (EX 25-42)
 Here, some one, the gentleman is going. Where are his clogs?
- (25) わたくし は てくらだ ふとし で ございます。はじめまして
 はいがん を. _____. (EX 25-7)
 I am Tekurada Futoshi. I have honour of seeing you for the first time.

対応する英語訳からは、(23) では「もってきてくれ (bring)」、(24) では、「おもしろなさい／ご用意なさい (Where are his clogs?: お客さまの下駄はどこだ)」、(25) では「たまわります／の栄に浴します (I have the honour)」のような表現が省略されている。

参考までであるが、(24) の英語訳を目にした読者の中には、稿者が1節で断ったこと、つまり、英語訳が必ずしも言いさし表現の意味するところと完全一致しないということ、を思い出した方がいるであろう。その断りに該当する最たる例が(24)の英語訳ではないかと思う。同様に、上掲(20)(22)も言いさし表現の意味するところと完全一致しない例である。このような日本文と英文の間にみえる意味のズレは、もしかすると、『会話篇』英語訳が直訳ではない可能性を示唆していることかもしれない。言いさし表現も含めて、『会話篇』日本文と英文の意味のズレに注目する場合、(24)の英語訳は好例になるものと思われる。

さて、論題を格助詞のことに戻して、「に」で終わる言いさし表現には、次のような例がある。

- (26) (前略) その ご たより も もうすべき の ところ, さらに
うちおこたり, ぶんつう も いたしません で, はなはだ も
うしわけ も ございません. さて どうじ は どちら に.
___. (EX 25-14)

(前略) I apologize for neglecting to let you hear from me, and for not
writing. Well, where do you live at present?

- (27) きょう は ちと とりいそぎます から お いとま を もう
します. いずれ また その うち に. _____. (EX 25-36)

I am rather in a hurry to-day and will take my leave. I shall have the pleasure
of calling again soon.

(26) では「お住まいですか (do you live at present?)」、(27) では「おうかが
いいいたします (I shall have the pleasure of calling)」といったことが含意され
ている。「に」の代わりに「へ」を使う例 (EX 16-5) もある。

最後に「は」で終わる言いさし表現は、次のように問いの場面に使われている。

- (28) ふた いろ に かいて ある よう に みえます が, この
わけ は. _____. (EX 20-4)

(S.) There appear to be two forms. What is the reason?

- (29) (前略) よい ところ で お め にかかりました. じつに お
ひさしぶり で, どう して まあ あなた は. _____. (EX 25-
12)

(前略) How fortunate to have met you here. What a long time it is...And
what brings you here?

(28) では「どういうことですか／なんですか (What is the reason?)」、(29)
では「何の用事で、こちらへお出でなされたのですか (what brings you here?)」
を言いさしている。問いの場面では「とは」を使った例 (EX 20-28) もある。

以上で、格助詞で終わる言いさし表現の内訳と、上位にある「を」「に」「は」
の実例を紹介しながら使い方を概観してみた。格助詞で終わる言いさし表現は、
砕けた場面や柔らかい雰囲気の場合で使われているのが特徴である。

6-3. 接続助詞で終わる言いさし表現の様相

接続助詞の内訳は、表5に示したとおり、「て」「が」「から」「ので」の4種

類で、出現回数は合計 11 回である（注 9）。

表 5 接続助詞の出現状況

て	が	から	ので
6	3	1	1

「て」で終わるものが 6 例、「が」で終わるものが 3 例、「から」と「ので」で終わるものが 1 例ずつある。ここでは、「て」と「が」で終わるものの実例を紹介する。まず、「て」で終わるものは (30) から (32) までのように、お願い・陳述、感謝を表す場面に出現している。

(30) いえ, けっして, どう いたして. _____. ただいま も もうした とおり, (後略) (EX 21-8)

No, certainly, how can you suppose. . . As I just said, (後略)

(31) さよう なら, ごめん を こうむりまして. _____. (EX 25-20)
Then, if you'll allow me, I will come in.

(32) (前略) せんねん は いろいろ ご こうおん に あずかりまして. _____. (EX 25-13)

(前略) In former days I was much indebted to your kindness.

(30) では「そのようなことはございません (英文: 言いさし表現)」、(31) では「お邪魔いたします (I will come in)」、(32) では「まことにありがとうございます (I was much indebted to)」が省略されていると考えられる。

次に、接続助詞「が」で終わる言いさし表現は、(33) と (34) のような場面をさしている。

(33) はあ, あの へん に しんるい が ある が, どうか やけなけりやいい が. _____. (EX 12-5)

G. Ha, I have relations living in that part of the town; I hope they won't be burn't out, but-

(34) これ は あまり そまつ な しな で ございます が. _____. (EX 25-23)

This is very shabby article, but I beg leave to present it to you.

(33) では「ひょっとして類焼したのではなかろうか (but- 以下)」が、(34) では「どうか、お受け取りください (but I beg leave to present it to you)」が省略されていると考えられる。

以上、接続助詞で終わる言いさし表現の内訳を確認し、また実例をみながら、その使われ方について検討した。『会話篇』において接続助詞で終わる言いさし表現は多くなく、その助詞の種類も限られている。ちなみに、現代語の言いさし表現に関わる接続助詞には、「けど」「が」「し」「て」「から」「のに」「ので」「と」「たり」「れば」「なら」「たら」等がある。これらの中で、現代語の言いさし表現には「けど」で終わるものが多いとされるが、『会話篇』には「けど」で終わる言いさし表現は見当たらない。「けれども・けれど」は逆接などの働きをする表現として（例えば：EX 7-27）12回確認されたが、「けど」は言いさし表現はもとより、他の働き（逆接を表す）をするケースの例も確認できなかった。

この「けれども・けれど・けど」で終わる言いさし表現が『会話篇』に見当たらないことについては、迂闊なことは言えないが、もしかすると、これらの言葉が言いさし表現の領域、いわば文末の使用（終助詞化）においては消極的であったか、あるいは同様な働きをする「が」の使用が当時一般的だったためかもしれない。後者の場合は、「が」による言いさし表現が上掲 (33) と (34) のように存在することと、またこれらの例において、「が」の代わりに「けれども・けれど・けど」を入れても意味的にさほど変わらないことが背景にあって、「けど」などで終わる言いさし表現が現れなかったと考えられる。

以上、『会話篇』にみられる言いさし表現について、その形式面からの分析を試みた。『会話篇』には、接続助詞で終わるものから接続詞で終わるものまで、11種類の言いさし表現が使われていた。副詞や接続助詞で終わる言いさし表現がゆったりとした雰囲気醸し出すものであるとすれば、格助詞で終わる言いさし表現は、熊谷 (1997) のような砕けた雰囲気、テンポの良さといったものがあつた。特に、格助詞で終わる言いさし表現は、大変な言葉の省略でありながらも丁寧さは変わらないところに魅力を感じる。

最後に次節で、『会話篇』にみる言いさし表現が、どのような言語行為と結びつくのかを紹介する。上記の6節で、例文から伺える傾向として簡単に触れたが、全体的な様相は把握できていないためである。

7. 言いさす場面

管見の限り、言いさし表現が表れやすい場面については、三原（1995）の「依頼、願望や断りなどの特定の言語行為と結びつき、聞き手に何らかの負担をかける場合に使われる」というような断片的な言及はあるが、網羅的に論述したものはない。幸いに、『会話篇』には様々な言いさし表現が出現しているので、それをもとに、多少なりとも全体が見渡せるようにデータを提示しておきたい。調査の結果は、次の表6の通りである。

表6 言いさす場面

状況確認	お願い	お勧め	お礼	お詫び	状況説明
15	12	10	9	8	7

質問	約束	状況推測	命令	断り
6	5	3	3	3

場面の内訳は、お願いをする場面から、断りをする場面まで、11の項目にわたっており、言いさし表現が表れる場面が多様であることが知られよう。その中で、状況確認をする場面が最高15回を数える。次に、お願いをする場面が12回に及ぶ。3位が相手に何かを勧める場面で、出現回数は10回である。4位はお礼の場面で9回確認された。5位はお詫びの場面で8回あった。状況説明の場面は7回、質問の場面は6回、約束の場面が5回、状況推測（上掲：33）と命令、断りの場面が3回であった。

お願い（上掲：16・21）とお勧め（上掲：1・14）の場面に出現回数が多いのは現代語に関する先行研究で得られる知見のとおりである。しかし、断りの場面に言いさし表現が用いられることが、現代語の様相と違って少ないのは興味深い。さらに、以下の(35)のような状況確認や、状況説明（上掲：30）、質問（上掲：26・28）、約束をする場面（上掲：27）に出現回数が多いという結果は新鮮である。

- (35) あなたは えちご の たかた へん で お い で な さい ま し
た っ け ね、 それ じ ゃ も っ と も、 ____。 え ち ご の た か た、 う ぜ
ん の お ば な ざ わ と い ち ゃ、 ゆ き の ふ る な だ か い と こ
ろ で す か ら、 な る ほど、 ____。 (EX 24-50)

You come from near Takata in Echigo, I believe. You have a right to talk.
When you say Takata in Echigo and Obanazawa in Uzen, they are such

famous places for snow, that of course...

「もっとも」の後には「な話しですね (You have a right to talk)」、「なるほど」の後には「そういうことですね (that of course)」が省略されていると考えられる。

また、お礼やお詫びの場面にも言いさし表現がよく使われていることは面白い。お願いやお勧めをする場面はもちろんのこと、状況確認や状況説明といった自分の意見を陳述する場面では、最後まで言い切らないことで、岡田 (1991) の説明のとおり、相手を尊敬すべき一人前の大人として待遇することにつながる。そして、お礼やお詫びの場面では、言いさし表現を用いることで、恐縮する気持ちの度合いや、一言で言い表せない心情を汲み取ってもらうことができる。そのため、このような場面に言いさし表現が重宝されたものと思われる。

8. おわりに

ここまで、『会話篇』にみる言いさし表現について、「EXERCISE 別の出現状況」、形式面、機能面、言いさす場面に分けて検討してきた。以下で、節ごとの要点をまとめておきたい。

まず、「EXERCISE 別の出現状況」では、『会話篇』の後半部と言える EX12 と EX15～EX25 までの間に多く使われていた。特に EX25 には 34 回も見られ、突出していた。

形式面では、11 タイプの言いさし表現が使われていた。そのうち、副詞で終わるもの、格助詞で終わるもの、接続助詞で終わるものが上位であった。接続助詞で終わるものを除く上位の二つのタイプは、現代語においては周辺的な扱いを受けるもので、詳しく取り上げた先行研究が見当たらない。そして、現代語においては、言いさし表現の全体の半分近くを占める接続助詞で終わるものの出現回数が少ないことも特徴的であった。

また、上位を占める四つのタイプの内訳を調査したところでは、1位の副詞で終わるものには、「どうも」「どうか」「はや」「どうぞ」が上位を占めた。2位の格助詞で終わるものには、「を」と「に」が上位であった。3位の接続助詞で終わるものには「て」と「が」が多い。『会話篇』には、「はなはだどうも」「なにぶんどうか」「どうもはやじつ に」といったように副詞を二つまたは三つ重ねた、連語的な形式の言いさし表現もあって、形式の多様性が見られた。

機能面では、副詞や接続助詞で終わる言いさし表現はゆったりとした雰囲気醸し出すものであるとすれば、格助詞で終わる言いさし表現は、熊谷 (1997)

の言うような碎けた雰囲気、テンポの良さといったものがあった。

言いさす場面については、「お願い」から「断り」まで、11の項目にわたって、言いさし表現が使われていた。中でも、状況確認、状況説明、質問、約束、お礼、お詫びをする場面に出現回数が多く、断りの場面には少なかったという結果は現代語の様相と異なるものであって、新鮮だった。

サトウは、最後まで述べないで、言いさし表現で伝えるという、実に日本語らしい話し方と使い方を『会話篇』に提示していた。先行研究でみた昨今の日本語教育の現場の状況から考えると、テキストに言いさし表現を導入していることに先駆性を感じる。

さて、『会話篇』の言いさし表現は、形式や使われ方において、現代語と異なる点が幾つかあった。例えば、接続助詞で終わるものが少なく、特に現代語においてもっとも出現頻度が高いとされる「けれども・けれど・けど」で終わるものが、『会話篇』には見当たらないことや、副詞を二つないし三つ重ねて連語的な使い方をするなどがあった。本稿は、このような使われ方が、当時、一般的であったがどうかを突き止めるまでには至っていない。今後、江戸後期の文献を点検することが課題である。

注

- 1 サトウの『会話篇』についての詳細は『日本語学研究事典』（1079ページ）を参照されたい。
- 2 本稿の引用文の原文はローマ字表記であるが、平仮名で翻字をしている。すべての平仮名は現代仮名遣いである。引用文中の下線と____、印は、稿者が付したものである。右の数字（EX 15-4）は例文の所在（EXERCISE 15編4番）を表す。
- 3 西田（1978）と坂口（1990）という研究はあったが、言いさし表現そのものの研究ではなかった。
- 4 言いさし表現の認定もさることながら、英語の不得意な稿者には英語訳との対応作業も大変難しかった。英語力の無さによるミスを最低限に留めたく、日英・英日の翻訳を仕事とする専門家にチェックを仰いだ。
- 5 参考までに記すが、『会話篇』の英文について、勤務先の英語のクラスを担当するイギリス人の講師に、事前にサトウに関する情報を与えず、感想を伺った。その講師からは、知識人が書いたハイレベルのイギリス英語であり、かつ自然であるという評を得た。
- 6 内容の難易度についてであるが、この差をきちんと測定できる基準はないようである。稿者の日本語の学習経験、また母国で日本語の教育に携わったこと、現在韓国語教育の現場で使用されるテキストなどによると、上級者が習う会話は

後半部に入っているのが一般的である。金沢（2008）も『会話篇』に表われる表現について、課が進むにつれて日本語として非常にこなれた難易度の高い表現が取捨選択なく提出されていると評している。

- 7 本稿で取り上げる副詞で終わる言いさし表現を、副詞一語文、あるいは言いさしのようにみえるものという考えを持つ研究者がいるかもしれない。だが、本稿では、先行研究で取り上げた高橋（1993）にも副詞で終わる言いさし表現を項目として立てていることや、サトウも副詞で終わる言いさし表現に対し、省略された部分を補った英文を添えていること、さらに水谷（1989、28）も文末省略、すなわち言いさし表現を待遇表現の一つとして説明する箇所、「その日はどうも…」という例をあげ、「都合が悪いんです」を言わずにすませたりすることもするという説明をしていることなどを踏まえて、本稿では副詞終わりの言いさし表現として認めることにした。
- 8 「はや」は『日本国語辞典』では感動詞とされているが、『会話篇』では強めの副詞として使用しているため、本稿では副詞の用例数に入れている。
- 9 本稿では、「て」で終わる言いさし表現を、湯沢（1954）と（1982）に習い、接続助詞で終わるものの項目に入れているが、現代語の高橋（1993）のデータでは、これを第二中止形（「て」）として別扱いをしており、高橋のデータに合わせて、「て」で終わるもの（6回）を接続助詞の項目から外すと、事実上の『会話篇』の接続助詞で終わるものの出現回数は5回となり、その割合はさらに低くなる。

参考文献

- 岡田 安代（1991）「日本人は、なぜ文末まで言わないのか？－会話を成り立たせる『共話』の原理」月刊『日本語』1アルク、9-13
- 金沢 朱美（2008）「アーネスト・サトウと日本語研究-『会話篇』を中心に-」『目白大学人文学研究』4号
- 金城 克哉（2001）「文末表現としての『けれども』の機能について」『言語文化研究紀要』10 琉球大学
- 熊谷 智子（1997）「はぶく」佐久間まゆみ・杉戸清樹・半澤幹一編『文章・談話のしくみ』桜楓社
- 小島 俊夫（1972）「会話篇（E.Satow）にあらわれた江戸ことば」『国語国文』41巻5号
- 坂口 至（1990）「近世上方語における接続助詞ケレドモの発達」『日本語学論説資料第3分冊、文法』27号
- 佐藤勢紀子（1994）「中上級日本語教育における中断文『…が／けど』の扱い方」『東北大学留学生センター紀要』2号 東北大学留学生センター
- 白川 博之（1990）「『テ形』による言いさし文について」『広島大学日本語教育学科

紀要第二部』38号

- 高橋 太郎 (1993) 「省略によってできた述語形式」『日本語学』明治書院、12-10
- 土井 洋一 (1969) 松村明編『古典語現代語助詞助動詞詳説』学燈社
- 西田 絢子 (1978) 「『けれども』考—その発生から確立まで—」『東京成徳短期大学紀要』11号
- 藤原 雅憲 (1991) 「話し言葉における助詞の省略効果」日本語教育学会編『平成3年度日本語教育学会秋季大会研究発表要旨』日本語教育学会
- 堀口 純子 (1985) 「話しことばに迫る」『日本語の教育』明治書院、第1巻
- 牧野 成一 (1996) 「ウチとソトの言語文化学—16. 引き込みとサスペンサー省略の文法」『月刊日本語』アルク、7月号
- 三原 嘉子 (1995) 「接続助詞ケレドモの終助詞的用法に関する一考察」『横浜国立大学学生センター紀要』2 横浜国立大学留学生センター
- 水谷 信子 (1989) 「待遇表現指導の方法」『日本語教育』69号
- 飛田 良文 (1977) 「英米人の習得した江戸語の性格」『国語学』108号
- 飛田良文・遠藤好英・加藤正信・佐藤武義・蜂谷清人・前田富義編 (2007) 『日本語学研究事典』明治書院
- 古田 東朔 (1974) 「幕末期の武士のことば」『国語と国文学』1月号
- 湯沢幸吉郎 (1954) 『室町時代の言語研究』明治書院
- . (1982) 『徳川時代言語の研究』笠間書房

(ゆ さむそん・桐蔭横浜大学非常勤講師)